

雲飛は自分の坊主頭をツルリと右手で撫でると、次に、きな子の爆弾のような胸を左右、それぞれを揉む。それから両手で彼女の両胸を同時に揉みしだく。きな子は服の上からとはいえ乳房を揉まれる心地よさに、

「あっ、はっ。気持ちイイ。」

と声を出すと、顔をのけ反らせた。雲飛は立ち上がると自分のズボンとパンツを外した。彼の巨大な肉砲身が全部、きな子の目に映った。(すんごく、太いのね。)と、きな子は思う。僧侶の勃起ペニスを自分の目で見たのは初めてだ。他人の目で見える事は、そもそも、出来るのだろうか?この坊さん、自分とセックスするつもり、だろう。独身の僧侶ならキャバクラにも来るだろうし。それにしても坊さんがチンコ立てて上着だけ着て自分の前に立っているなんて構図は今まで考えた事も、なかったわ。

雲飛は、きな子に、

「おれのモノを見て、セックスする気になっただろう。」

とダメ押しをするように訊く。きな子は、

「ええ、そうみたいです。」

と投げやりな返事を返した。雲飛は、きな子を抱きかかえるようにして立たせた。それから自分の両手を雲飛は激しく動かして、きな子の上着とスカートを脱がせた。白いブラジャーとショーツだけの全身になった、キャバ嬢の、きな子。どちらも薄い下着なので彼女

の赤い乳首と黒の陰毛、それに股間の食い込んだ縦筋は雲飛の目にも明らかに見えた。雲飛は自分の上着とシャツを脱ぐ。全裸になった彼は下着姿のきな子を抱きしめると、分厚い唇を彼女の赤い小さな唇に押し付けて濃厚に口づけを続ける。

その部屋にも寺らしく仏像があり、その前には経机とリン、など本格的な仏具が並んでいる。

雲飛は右手を、きな子の股間に入れるとジンワリとショーツは濡れていた。そのショーツを勢いよく雲飛は下に下げると、膝の辺りで、きな子は交互に足を上げてショーツを外した。黒く濃い林のような陰毛が、きな子の淫唇の上に繁茂している。

雲飛は、きな子を抱きかかえると仏像の前に二人で移動すると、雲飛は自分の両膝を開いて正座した。その上に豊満尻を抱かれた、きな子が両脚を開いて座ると雲飛の股間からニョキリと屹立した肉欲棒、肉欲如意棒が彼女の股間の中心を貫く。二人は仏像の前で合体した。雲飛は彼女の尻を抱いていた両手を、きな子の背中の上に持って来ると合掌した。そして、きな子にも、

「合掌しなさい。きな子。」

と促す。きな子は素直に合掌した。雲飛は合掌した両手を外すと、きな子に、

「合掌を、やめていい。今から動くから、しっかりと私につかまっていなさい。」

と話した。きな子の両手は雲飛の裸の背中に回され、そこをしっかりと抱く。その途端、正座した雲飛は裸の腰を動かし始めた。結構な揺れが、きな子の全身に来た。それは彼女の淫洞窟内を刺激し、快楽を与える。仏像の前でのセックスは、きな子にとっても初めてだったのだ。前後左右に揺れる、きな子の白い裸身は彼女の黒い長い髪と同じく乱れ始める。彼女は赤い唇を開くと、

「あああっ。浄土に行きそうっ。」

と切なげに声を上げる。

雲飛はリンをチーン、と鳴らすと木魚を叩き始めた。右手で木魚を叩き、ポク、ポク、ポク、左手で経文を手にとると読経を始める。と同時に雲飛は自分の腰を動かすのだ。

『愛欲自在経』

を雲飛は読み上げている・・・。

所は変わってチベットの流太郎とトントンプー村長は会話を続けている。流太郎は聞きなれない言葉に、それを聞き返した。

「愛欲自在経、ですか。聞き事もない、お経ですよ。」

トントンプー村長は得たり、賢しと、うなずき、

「日本人の、ほとんどは知らんのじゃけどのう。チベット仏教のゾクチェンに、それがあるよ。愛欲自在経を読経しながら女人と交われば生きながら極楽を悉知する、と。」

「は一、極楽三昧ですね。それは、いい。」

「チベット仏教の一つの神髄かと思う。日本の坊主は哀れ、と、わしらは思うとるのじゃが。昔の日本で吉祥天の木像に夢精しよった坊主が、いるという。実際の話でな。それよりもチベット仏教のゾクチェンでは愛欲自在経を読経する際の相手の女は美女を第一義とする、あるのじゃ。」

流太郎は感心して、

「トントンプー村長はゾクチェンを学ばれたのですか。」

と訊いてみると村長は、

「ああ、少しな。だが実践は、しておらん。日本の坊主で愛欲自在経を読経するものも、福岡市郊外の寺におる、という話は聞いているがな、雲・・・なんとかいう坊さんらしい。チベット仏教のゾクチェンを修行して日本に帰ったという。時さん、時に、あんたは福岡市に住んでいるそうじゃな。」

「ええ、福岡市東区香椎ですけど。」

「その坊さんは西の方の郊外にいるらしいな。帰国したら会ってみるのも、いいかも知れん。」

「ええ、そうしてみますよ。」

福岡市郊外の雲上山、栄海寺での雲飛の、きな子との坐位セックスは頂点に達しようとしていた。射精をこらえるために雲飛は、きな子を抱きかかえて立ち上がり、なおも左手と右手には愛欲自在経と木魚を叩く棒を持っている。この棒はバイというバチが正式名称

だ。それらの仏具も、ここの栄海寺にあるものはチベットのものらしい色彩がある。雲飛は射精を、こらえられなくなったのか急速に座り込むと、バイでリンをチーン、と鳴らし、

「愛欲成就、快樂即極樂。」

と愛欲自在経を唱え終わると、正座したまま、きな子の豊満尻の中に連続で二回、射精した。

二人は快感の渦に巻き込まれたように、しばらく陶然としていたが雲飛の如意肉欲棒も次第に縮小したので、二人は合体から離れた。

雲飛は裸体で正面からもたれている、きな子に、

「もし貴方が妊娠したら、それは当寺にとっても喜ばしい事ですから、連絡をください。決して堕胎など、せぬように。」

と念を押す。きな子は、

「出産したら、引き取ってくれるのですか。ここへ。」

と真顔で聞く。雲飛は余裕綽々と、

「無論ですよ。貴女が育てますか?」

「いいえ、引き取ってください。その方が、いいと思います。」

雲飛は満足した。もっと、きな子に射精したかったが、妻の快念とのセックスの場合は、これで終わりなので続ける精力も出ない気が雲飛には、した。雲飛は立ち上がると部屋の隅にあるタンスのなか

から僧衣を取り出すと下着を着ずに、僧衣を身にまとい眼鏡を取る。

そこには普通の僧侶らしい姿が、あるだけだった。きな子はショーツを履き、ブラジャーをつけて、衣服を着たけれども。

再びチベットに戻って、トントンプー村長と流太郎は話を続けている。村長は、

「キミには自由行動も必要かも知れん。どうだい、外に出てみないかね？」

と予想外の提案をした。流太郎は、

「外に出るって、いっても僕はチベット語を知りませんから、何かの際には困りますよ。」

と抵抗する。村長は、

「いや、なに。そこが面白い処でな。私が渡す眼鏡とイヤフォンを身に着けて外出すれば、いいのさ。」

と自信ありげな様子だ。流太郎は、

「なぜ、そんなものを身に着けるんですか。伊達眼鏡と何のためのイヤフォンでしょう？」

「君がチベット語を知らないと言っからさ。ついでにマスクも、していくんだ。」

「眼鏡にイヤフォンに、マスク。それでは病人に見られます。」

「そう見られてもチベット語が分かれば、いいだろ?お金も多く渡して置こう。キャバクラも街には、あるよ。入って見るように。」

そういう訳で流太郎はトントンプー村長の渡した眼鏡、イヤフォン、マスクをして街に出た。不思議や不思議、なんと不思議にも街の看板の字が眼鏡を通すと日本語に見えるのだ!信じられない、というか、このあたりの看板は日本語のものもあるのかと思い、流太郎は眼鏡を外した。すると看板の文字はチベット文字で、一語も理解できない言葉が看板にあった。又、眼鏡を掛けると、そのチベット文字が日本語になるという何とも不思議なメガネだ。

(こりゃ不思議、というより便利だな。)と流太郎は思いつつ街を歩く。露天商から荷台に乗ったトマトを一個買うと、それを食べる。うまい、そう思いつつ歩き始めた流太郎は、やがて繁華街の中にキャバクラらしき店を見つけたのだ。

チベット一のキャバクラ、ルナルナ、と、ある。眼鏡を外せばチベット語で書いてあるのだろうが、外したら読めない文字になるから今度は眼鏡は外さない。

店のドアを開けると、すかさず、その店のチベット人のマダムが呼びかける。

「いらっしやいませ!ようこそ、あら、日本の方のようね、チベット語、分かりますか。」

流太郎はチベット語など一語も解さない。すると、今のは日本語ではなかったのか。もしや?と思い、日本語で話してみた。

「分かりますよ。今、あなたが話したのはチベット語でしたですよ。」

それが流太郎の耳には分からないチベット語で相手に通じたいらしい。彼の耳には日本語で聞こえているけど。

マダムは目を丸くして、

「まあ、上手なチベット語を話しますね。もちろん、私は日本語は話せません。」

と話す言葉は流太郎の耳には、すべて日本語で聞こえる。トントンプー村長から貰ったイヤフォンは言語を自動変換して耳に伝えるらしい。そしてマスクは喋る日本語をチベット語にする。流太郎は、

「あなたのチベット語も解りますよ。出来ればナンバーワンの女の子を呼んで欲しいな。」

と要望すると、マダムは、

「はい。まだ時間も早いから、ナンバーワンのチェリネを行かせます。一番奥の席に、どうぞ。」

と右手で奥まった上等な場所を指し示した。

その場所の、ゆったりとしたソファに座ると、チベット美女のチェリネが自分で盆にグラスを二つ乗せて、やってきた。彼女は流太郎の横に座り、グラスに酒を注ぐ。チベットビールだ。

男性のボーイが「トックパ」という日本のラーメンみたいで麺が細いうどんのような料理を持ってきた。チェリネは、

「あなた日本人みたいだけど、チベット語うまいらしいですね。」と話しかけてきたので、流太郎は、

「そうかな?自分でも、よく分からないよ。」

と日本語で話すと、それはマスクを通してチベット語に同時に変換されるから流太郎の耳にもチベット語でしかない。チェリネは、その言葉を聞いて、

「とてもチベット語が、うまいよ。おにいさん。」

と手放しで褒める。

「そうかい?それは嬉しいな。」

兎に角、話してみるしかない。

「くだけたチベット語も素敵。日本から何故、チベットに来たの?」プロキシマb星人と地下鉄で来た、などとは答えられない。

「ん?社用だよ。ぼくはサイバーセキュリティの会社に勤めているんだ。」

「サイバーセキュリティって、何のことか、分からないわ。」

「インターネット関連さ。」

「ああ、インターネットね。わたしも、お客さんとインターネットで、やりとりしてる。」

チェリネの肌は白く、髪は波だって目は漆黒より少し灰色がかっていて神秘的だ。胸の膨らみが目立つ服を着ている。流太郎は、

「何人も、お得意さんが、いるんだろうね。」

と訊いてみると、

「十人は、いるのよ。対応に大変よ。」

「今日は、僕が一番乗りだね。」

「そう、なりますけど。マスクを外して、お酒を飲みませんか？」

「ああ、そうするよ。」

流太郎は白いマスクを口から外して、チベットビールを飲む。うまい、と思ったらチェリネが、

「日本のビールと比べて、どうですか？」

と訊くので、

「とても、うまいよ。」

と日本語で話した。チェリネは、それを聞いてキョトン、とした顔になる。日本語が分からないのだ。慌ててマスクをすると流太郎は、

「とても、うまい。日本のビールは日本で飲むためのものだね。比較は、難しい。」

と日本語で話しても、その不思議なマスクはチベット語に変換してチェリネの耳に届くのだ。彼女は、それを聞いて、

「よかった。さっきの言葉は、日本語ですか。わたし、少しも分からなかったけど。」

「ああ、そう日本語だった。つい、うっかりして話してしまったね。これからは気を着けよう。」

「いつまでもマスクをしているのは変だわ。料理も食べて欲しいのに。」

「あ、そうだね。食べる時は外すよ。」

「病気なのですか?風邪とか、そういう状態にあるの?」

「そ、そーだね。マスクなしでは、いられないんだ。」

「えー、そうなの。お大事に、してね。」

と云う風に、何とか流太郎は逃げ切った。マスクなしではチェリネとの会話は成り立たないのだ。マスクを外して流太郎は急いで料理を食べた。そして又、マスクをする。

チェリネは喜んでいるようだ。自分の腕を横にいる流太郎の腕に当てると、

「今日は早く帰れる日なの。わたしの家に、一緒に来ない?泊まって行っても、いいから。」

と意外な話を始めた。

チェリネの家まで彼女と歩いている流太郎である。午後二時くらいか。キャバクラで働いている彼女は高級マンションで一人暮らしをしているのだろう、と流太郎は思いを巡らせつつ歩く。街に見え

る看板の文字は総て日本語に見えるのでチベットにいる事を忘れるようだ。こんな凄いメガネを村長のトントンプーは持っていたのだ。それからマスク、イヤフォン。これらも日本語に自動変換する機器なのである。

チベットには一万歳を超える人が何処かにいるという話がある。超絶した文化があるのだろうか。トントンプー村長は、それで、そういうものを所持しているのか。地底王国シャンバラの入り口はチベットにある、という噂もある。

美人のチェリネは人目を惹く。それで彼女の隣を歩く流太郎も注目されるが素顔でないから幾分、（`▽`）ホッとする。ポタラ宮殿に似た寺院が見えた。チェリネは、その寺院を指さすと、

「チベット密教の寺だけど、興味あるかしら。」

と流太郎に歩きながら質問した。流太郎は、

「ああ、ありますよ。日本の密教とは違うんでしょう。というか、そもそも密教って何だか知らないけど。」

「興味があれば、それでいいの。あそこに入れば分かるわ。」

「観光では入れるのかい。拝観料が、いるんじゃないのかな。」

「あの寺が、わたしの実家よ。」

その一言に流太郎はガツンと脳に一撃を食らった。それで黙ってチェリネに、ついて行く。大きな寺だった。中に入ると参詣客も多

い。その人たちを横目に見ながら僧院の中に入るチェリネを流太郎は追う。

僧院の中は誰もいなかった。チェリネは自分の部屋らしき広い部屋のドアの前に立つと流太郎に、

「わたしの部屋に入りましょう。」

と誘う。流太郎は、うなずく。

靴を履いたまま、二人はチェリネの部屋に入る。ベッドや机は部屋の隅にある。奥に仏像が、あった。チェリネは衣装ダンスの前に歩くと、私服を脱ぎ始めた。すぐに下着姿になり、形のいい乳房が薄いブラジャーに覆われているのが見えた。横幅の広い大きな彼女の尻はスカートを脱ぐと、プルンプルンと揺れる。

一旦、下着姿になるとチェリネは流太郎の方を向いて立った。股間のショーツには陰唇のスジがクッキリと浮き立っている。流太郎との距離は二メートルほど。彼女の乳首も浮き立って見える。

流太郎は少しずつ自分の股間に前進の血液が集まるのを感じつつあった。チェリネは衣装ダンスの中から僧服を取り出すと、それを着る。さっきの下着姿は見えなくななり、女僧とでもいうべき雰囲気チェリネになった。流太郎の股間の充血は分散した。チェリネは、

「わたしは、この寺院の院長の娘なの。キャバクラには週に何回しか、行かないわ。それ以外は、この僧院で修行か仕事をしていま

す。」

彼女は黒髪に手をやると、右手でスッと髪全体を引いた。パカッと取れたのは彼女のカツラだった。日本の尼僧のように剃毛して、スポーツ刈りのようなチェリネの頭部である。流太郎は、

「ぼくは、このままでいいですか？マスクとか取った方が、いいかな、と。」

と云ってみる。そうすると言語による意思疎通は出来なくなるのだろうけれど。チェリネは両肩を西洋人のように、すくめて、

「そのマスクをしているから、チベット語を喋れるんでしょ？」

と指摘した。なんだ、知っているのか、と流太郎は思った。

「そう、そうなんです。これが、ないと僕はチベット語が話せません。」

と言い、右手の人差し指で自分の白いマスクを指さした。それを見るとチェリネは婉然と微笑み、

「チベット語を話さなくてもいい世界に連れて行ってあげられるわ。そのためにもチベット密教、ゾクチェンの修行をしましょう、今から。」

と流太郎を、いざなうのだ。

その部屋で流太郎はチベット密教の僧服をもらい、身に着けた。プロキシマbに行くはずでは、なかったのか、と思い出すが、こういう展開も悪くはないのかもしれない。

結跏趺坐という胡坐(あぐら)に似た姿勢で座り、両手の指を組んで瞑想をする事を流太郎は習った。曼陀羅を指で作るやり方がある。それをチェリネが自分の手で、やるのを真似て流太郎も組めるようになった。

チェリネは大きな窓を開けた。流太郎の視線は窓の外に出た。丘の上に立っている僧院は、下の方にある街並みを見下ろせた。チェリネは、言う。

「空を見るように。そして何も考えないで。もしも何か、思いが浮かんでも、そのままにしているように。それが、ゾクチェンの瞑想です。」

流太郎は、なるほど、そういうものか、と思った。窓の外に見える赤い建物がチベットの僧院だ。ここの他に、いくつも見える。日本と違って僧の衣服も赤色なのがチベットの特色だろう。真紅というより、えんじ色の赤だ。チェリネも今は、その赤の僧服を着ている。流太郎も身に、まとっているのは赤色の僧服だ。

空を見ていると、ぼーっとしてきた。何も考えが浮かばない。それで、いいのだろう。これがゾクチェンの瞑想なのだ。おや？

流太郎は股間に手を感じた。柔らかい手の感触。その手は流太郎の、おとなしくしている男性器を撫で始め、柔らかに掴む。そして軽く、しごく。チェリネが後ろから流太郎の股間に手を伸ばしているらしい。やがてムクムクと起き始める流太郎のイチモツ、それを

グン、と柔らかな手は握ると、次に流太郎の僧服の股間の切れ目から隆起してき始めた肉砲を僧服から出した。マスクをしている流太郎は、

「チェリネさん。何をしているんだ。」

と声を出すと、後ろのチェリネは、

「声を出すと思考が乱れるでしょ。何も考えないで、と言ったわよね。この位で瞑想を止めては、いけない。」

と、たしなめる口調である。

チェリネの右手は柔らかく、気持ちいい。何も考えるな、というのは無理だ。チェリネの手の皮膚は彼女の膣の感触を連想させた。何も考えずにいるとチェリネの全裸を想像した。全勃起しても射精を耐え続けるとチェリネの右手の動きは止まった。彼女は、その場を離れると仏像の祭壇の前から絵のような物を持ってきて、

「これはタピリツァというものです。」

と話すと、その宗教画を流太郎に見せた。仏らしい人物が結跏趺坐を組んでいる。その姿の周りは虹色で囲まれている。驚くべき事に、その仏は全裸であり開かれた股間からは勃起した男根が屹立しているのだ。巨根の仏の男根、こういうものは流太郎は初めて見る。チェリネは、もう一枚の宗教画を持っていた。それを次に流太郎に見せる。

そこには結跏趺坐して勃起した仏に両脚を広げて跨っている若い美女が描かれている。彼らは互いに見つめ合い、座ったまま結合しているのだ!チェリネは、

「チベット密教では肉食を認め、性交も否定しません。むしろセックスは悟りへの一番の近道だと、します。だから私達も、そのうちセックスしなければ、なりませんね。でも、今少しの時間は要します。何故なら、貴方もチベット密教のゾクチェンに習熟しなければ、ならないからです。」

と教え諭した。チェリネの豊満な胸は赤い僧服の上からも、ハッキリと見て取れる。流太郎は、(自分は勿論、チベット密教の初心者だ、やれやれ、これから、どうなるのか)と慨嘆する。僧服の股間から自分もチンコを出しているままで、このままで、いいのか、とは思うのだが。チェリネは、

「今日は、この辺で、いいでしょう。チンコも服の中に、しまっ
ね。」